

平成 27 年 4 月

語り部：中山 淳

私が生まれたのは 1930 年で、生まれたときからずっと日本は外国と戦争をしていた。私が生まれた翌年の 1931 年に満州事変が起こった。小学校 1 年生の 7 月には日中戦争が始まった。小学 5 年生の 12 月にアメリカやイギリスなどの連合軍と太平洋戦争が始まった。15 歳の中学 3 年生のとき、終戦を迎えた。皆さんのように、戦争のない平和な時代に生まれたことがうらやましい。とても幸せなことだ。これからも平和であり続けてほしい。

日本も江戸時代頃は藩に分かれており、国の中でいろいろな争いが起こっていた。しかし、明治維新によって日本の中での戦争はなくなっていた。

(当時の松山市街の地図を使い、堀之内や練兵場、住んでいた所の説明)

私が小学生の頃、堀之内には陸軍の二十二連隊本部があり、一般の人は入れなかった。今の日赤辺りにあった練兵場には鉄条網が敷かれており、戦車などを置いていた。戦場と同じようだった。戦争をするための訓練場だった。そこで訓練を受けた兵隊が連隊を組み出兵した。私も中学生になると、その練兵場で訓練した。今の JR 松山駅から出征する兵士をみんなが日の丸の旗を振って何度も見送っていた。

現在は全員中学校へ進学できるが、当時、男子は中学校、女子は女学校と別だった。中学へ上がるためには試験もあり、4 倍～5 倍の競争率で、クラスの 3 分の 1 ぐらいしか進学できなかった。

中学生になると、軍人が着るようなカーキ色の制服を着て、ゲートルを巻いて、隊列を組んで登校していた。1 年生から軍事訓練（教練）を行っていた。練兵場には塹壕があり、鉄砲を担いで練習していた。

中学 2 年生になると、午前中は授業を受け、午後からは勤労奉仕でクラスの 50 人がトラックの荷台に乗って基地に行った。今の松山空港がある場所には海軍航空隊の基地があった。面積は今の空港の 3 倍ほどだった。私たちは飛行機を格納するための掩体壕を造った。2 人でモッコを担いで田んぼの土を積み上げていた。

中学 3 年生になると新居浜に行き、学徒動員として軍需工場で働いた。親元を離れ、工場の寮で寝起きし、朝から晩まで働いた。勉強はできなかった。

ある日、ウー、ウー、ウー、と空襲警報が断続的に鳴り出し、防空壕に逃げた。しばらくして解除になって出てきたところ、右手側にカラスが急降下するように爆弾が落ちてきた。途端に目の前が真っ赤のようなピンク色になり、猛烈な爆風により吹き飛ばされた。建物に寄りかかって休んでいた友人は、飛び散った窓のガラスにより、切り傷だらけになっていた。田んぼに落ちたようだ

ったが、ものすごく大きな穴があいていた。一緒にいた友人5人のうち3人が弾片で負傷した。負傷した3人のうち1人は手首から血が噴き出し、1人はお腹を抱え、1人は背中が痛いと言っていた。私も友人の応急処置を行った。

当時は土日の休みがなく、「月月火水木金金」だった。歌にもなった。1週間休み無しで働いていた。時々、まとめて3日ほど休みがあり、昭和20年7月25日に休みになったので松山に帰った。そうすると、翌日の7月26日に松山は空襲を受けた。

(模型を使って焼夷弾の説明)

鉄の中にはドロドロの油が詰まっており、地面に落ちると信管が作動し、火のついた油が飛び散って建物などにひっついていった。日本の建物はほとんどが木造であったため、すぐに燃え広がった。花火が上がったようだった。ドロドロの油であったため、なかなか消えなかった。松山の町が一晩で燃えた。

当時はみんな、非常食をいつもリュックにいれて、寝る時には枕元に置いていた。それを持って、弟と妹の3人で手を繋いで、今の済美高校辺りを通って、石手川の土手まで、追ってくる火の中を必死に逃げた。爆弾が混じっていると被害が更に拡大していたかもしれない。

友人に広島出身の人がいた。中学校の試験に合格して、今治や宇和島から来ている人もいた。広島の友人は広島から帰って来なかった。戦争が終わってしばらくした時に、探しに行ったが会えなかった。

松山と広島では被害に違いがある。

松山の場合は燃える物はみんな燃えてしまっていた。松山大空襲の2日後に市街地に行った。自宅では小鳥を飼っていたが、逃がすことができなかったので、白いマッチのような骨となっていた。可哀そうなことをしたと思った。不発弾の爆発だと思うが、女の人の悲鳴が聞こえた。全く音のない世界だった。空襲前は電車やバスが通っており、生活の音があったのに、空襲により音まで燃えてしまったのかと思った。地獄とは音のない世界かと思った。

近代戦争は、兵隊同士の戦いだけでなく、直接関係のない子供、老人、女性など老若男女が犠牲にあってしまう。兵隊に行った人で亡くなったのは200万人と言われている。戦災で亡くなった人は、その約3分の1の、70万人と言われている。これからの戦争はさらに犠牲が増える。

松山では、燃える物は燃えていたが、レンガの塀などは残っていた。しかし原子爆弾の落ちた広島では、ブロック塀も何もかもが無かった。ものすごい力が加わり、瞬間的に何もかもが吹き飛ばされたようだ。焼夷弾攻撃の場合と原子爆弾攻撃の場合について、全然被害が違う。修学旅行で広島に行った際、松山との被害の違いを調べてみて欲しい。

質疑応答（約 10 分）

Q：空襲があったときどう思ったか？

A：弟妹と無事にどういう風に逃げようか、それだけだった。火の雨の中を逃げるのはとても怖かった。とにかく怪我をしない様に必死に逃げた。他の事を考える余裕はなかった。

Q：小さい頃に戦争の事はどう思っていたか？

A：絶対に戦争に負けてはいけないと思っていた。当時は日本が勝っているという報道がほとんどだった。本当はそうではなかったということを戦争が終わってから知った。負けることは無いと思っていた。戦争に勝つために何ができるかを考えた。思いをひとつにしないといけないという教育を受けていた。

Q：戦争をいけないと思ったのはいつ？

A：戦争当時は、戦争に絶対負けてはいけないという思いの中にいたので、良いとか悪いとかいう考えを持つことができなかった。終戦後、9月に学校が始まり、先生が本当のことを教える事が出来なかったと涙を流しながら謝った。アメリカの本を読んだり、アメリカの兵隊さんから話を聞いたりして受け入れられるようになった。とても時間がかかったと思う。

Q：戦争が終わった時にはどう思ったか？

A：本当に辛く、残念で涙がでた。ちゃんとしたことを教えてくれなかった先生に殴り込みに行くと、先生も涙を流しながら謝ってくれた。心の中のすごい葛藤があった。